



第二十二回 『21世紀の資本』と「ヒバナの瞬き」

考え



人の心の隅っこを  
やな感じでほじる

弦楽器イルカ  + 友人

お久しぶり。

最近、仕事が忙しいというか、プログラミングの勉強で忙しい。

返信が遅くなって申し訳ない。

忙しいって言うておきながら、最近、ピケティの『21世紀の資本』を読んだ。

日本から取り寄せてね。

メモを取りながら丁寧に読んだら、経済学素人の自分でも理解できたよ。

超おおざっぱにまとめると、まずはピケティの言う格差は、収入や資産が上位10%のごく一部の人間が、さらに儲かる仕組みがあるってことだ。

それが事実だとしても、ピケティはマルクスほど深く社会をひっくり返そうというわけではないから、90%の人々や、もっと貧しい人々が、10%の奴らから、お金を強奪してもよいとは、はっきりとは書いていないね。

格差が悲劇を生んだ例として、南アフリカの鉱山労働者が、経営者側が手配した軍隊によって何十人も虐殺されたことが挙げられている。

この鉱山労働者は自分の意思で、職場を選んだはずだけれども、こういうことが起きてしまうのが、南アフリカなんだと思う。

日本も同じなのかな。

原発労働者は、自分の意思で福島で働いているからね。

どこまでが、自分の意思で、どこからがやむを得ない環境におかれてしまったのかよくわからないな。

ところで、今の日本は法人税が高いという問題が有るね。

お金持ちが、国を通じて貧乏人に、金を持っていかれる仕組みがある。

もっとも影響が大きいのは法人税だ。

法人税が高い日本は、かなり平等システムが働いている国だと思う。

これ以上、法人税を安くしたら、法人が海外に逃げていってしまうね。

まあすでに海外に行っている会社も多いけれど。

おそらくは、国民の大半は、国に与えるものよりも、国からもらっているものの方が多いだろう。

だから、日本人の金持ちを日本にとどめておくことが、貧乏人にとっての最良の作戦だよな。

そして、国からもらっているものは、日本のお金持ちから奪い取った税金であることを忘れてはいけないと思うよ。

日本は日本人としての誇りと名誉があるから、たとえ税金面で損をしても、日本にとどまっているお金持ちが多いと思う。

日本としてのまとまりのお陰で、自分も含めて、日本人の大半（とりわけ貧乏人）は利益を得ているわけだ。

そういう仕組みで世の中が回っていることを、知るのは大事なことだと思う。

世の中の仕組みは、先生やテレビは教えてくれないものだ。

ピケティが書いていたが、先進国でも、多くの人（90%くらいだったかな）は、財産が300万円以下しか無いんだとさ。

ちょっとの貯金と、家具や家電、車とかくらいしか、財産をもっていないのが普通だ。

けれど、先進国では一人あたり平均では、2000万円以上の財産がある。

金持ちは財産を使ってより財産を増やす（年3%とか5%とか）。

国という装置は、その金持ち層から、お金を奪い取って、国家予算を作り、おもに貧乏人に回るように手配する機能だと思う。

ようするに、自由に競争をさせると、脱落者が多くなってしまうので、貧乏人にハンディキャップを与えてすこし有利にしてあげるのが、国の役割と考えられなくはない。

最後に、多分、こういう考えはすごく、自民党的であると思う。

民主党的な発想は全然違うから、民主党的な意見の人に、どういうふうに考えているか一度聞いてみたいと思う。

僕からみると、民主党は世の中の仕組みをわかっていない気がする。



久しぶりにありがとう！ いいね、すっごく面白い。

感想の前に、そういえば前に「リトル・ピープル」的支配と陰謀論の話をした時、Uが単純な陰謀論にするなって言ってた件、もちろん俺も単なる陰謀論で片づけるつもりは毛頭ないんだけど、アレ、支配される側の貧乏人にも支配を受け入れる意識があって、それはメディアの洗脳だったり周囲の空気だったり無数の要因が絡み合ってるって現実を、空気さなぎの何とも言えない感じとかで表現してんだらうね、きっと。どんな残虐行為も結局は国民一人一人が大なり小なり加担してるワケだし。

さて、ピケティ読んでくれてありがとう！ すっごいわかりやすかった。俺はできれば読みたくなかったからすっごく嬉しい。格差は拡大するし、金持ちはより金持ちになるってのはごく自然で、でもそれが今までデータできちんと語られてこなかったからブームなのかな。でもここウマシカ王国ではブームよりずっと前から俺とUとですっごい火花散らしてたし、ここではむしろピケティの方が遅れてきた新人って感じなのに。まあ所詮、「ウマシカの王」じゃ煙玉にもならないか。

俺は与党も野党も同じ金持ち権力者だと思ってるから答えになるかわからないけどやってみよう。今まで取り上げてきたデータを一応まとめると、2013年この国の年収別で、1000万円を超える人が前の年より14万人増えて186万人、全体の4%となった一方、200万円以下の人は30万人増えて1120万人、全体の24.1%、更に年収100万円以下は421万5000人。結局200万円以下が増えて国民の約一割になってるそうだ。

また、米では2019年の富裕層人口は1900万人になる見通しで、現在でも上位1%の収入が国民の全収入の約2割、また、上位10%の収入が約5割、この流れは2000年以降発生し、今後も拡大しそうって話だ。更に世界の富裕層人口は3500万人で全体の0.7%だが、世界全体の富に占める割合は44%だそうだ。

また2013年のデータで、この国の国民世帯の8割程が資産3000万円未満で、国の資産の4割程しか保有していないらしい。

とりあえず確実に言えるのは、円安・株高・物価高になればなるほど、タンス預金の価値は下がり、逆に大金を投資できる世帯は儲けられる。そしたら、貧乏人が金持ちに逆らうのはもっと難しくなるってことだ。天下りが天下を取るまさに「天国」と呼べそうだね。

現代生活を営む上で国は必要だし、貧富の差はいつの時代も絶対にある。だから格差を悪と決めつけるよりも、収入格差に見合うだけのリスクやストレスや労働時間の格差があるかどうかのほうが重要じゃないかな。

勤務実態のない顧問収入で閣僚を辞任した政治家や、若い頃は頑張ってたかもしれない天下り職員とか特に公金で高収入を得ている人々と、3Kの現場労働してる低収入の人々を比較して、具

体的に、どこにどう問題があるのか、ないのか、微に入り細にわたり国民に問うのが文化の役目の一つだと俺は思う。

と言っても、今回俺がやりたいのはこんなモテなそうな話じゃなくて、もっと軽めの話だよ。久々なのにごめんね！

『火花』って、今売れてる本をまず褒めようと思うんだけど、すごく誠実に書かれていて、また、挫折を描くことに成功していると思った。誠実さっていう意味では、むしろもっと編集の手を加えて推敲したらって思うくらい誠実だった。そして挫折の部分では、中途半端な人々の中途半端な挫折が描かれている。

内容は「センスはあるけど一般ウケしない芸人」に振り回される物語なんだけど、たとえば同じ芸能人だとリリー・フランキー『東京タワー』のオカンとか、『佐賀のがばいばあちゃん』のばあちゃんを思い浮かべた。でもそれらほど面白いエピソードは俺にはなかった。

芸人論についても、同じ事務所の松本人志『遺書』とかと比べたら、俺には面白くないし説教臭い。

貧乏エピソードも、同じ事務所の『ホームレス中学生』ほどぶっ飛んでない。

全部中途半端なんだけど、中途半端だからこそ挫折する。そこがリアルに描けてる。文学だから、スーパーマンを描く必要はない。

そして何より、褒めるのにちょうどいいサイズだ。長さ、内容、ユーモア、文章、その他モロモロ、今の時代にぴったり合ってると思う。時代からはみ出ちゃう芸人の物語のはずなのに、実はぴったり時代に納まってる。SMAPが「時代遅れのオンボロに乗り込んでいくのさ」って歌ったら、「それはもう時代遅れじゃなくて最先端にナウいオンボロだよ」ってパラドックスと一緒だ。

ここまで、褒めた。これ、褒めましたよ、ホントに。芸人が書いたって意味では本当にすごいと思う。

お金を払わないで読んでたらたぶん、ここまでで終わってた。でも、1200円払っちゃったからね。ここからは、おこがましくも尊大で不遜で偉そうに本当にやな感じで人の心の隅っこをほじくってみよう。

この本の最も理想的な読者は何といっても作者らのライブが好きな人だろう。破天荒な芸人のエピソードや、感動のライブでちゃんと笑える読者は幸福だ。また彼らをつまらないと思ってる人でも、細かいエピソードが好きな人にはいいと思う。

ただこの物語の一番難しいところは、中途半端な人物が主人公である点だ。つまり中途半端だからこそ、やっぱあんま面白くはない。俺にとっては。

たとえば「共感の笑いはつまらない」って会話がある。同感だ。逆に「共感の笑いが一番だ」って書かれたら本破ってるそこだ。ただ「共感の笑いはつまらない」ってのはもう当然であって、今さら説教されてもあんま面白くはない。俺にとっては。

今はテーマとか言いたいことってやつを丁寧に文中で書くのが流行りだ。ここ笑うところって

テロップを出すようにね。でも文字でただベタっと書くんじゃなくて、物語を描写することで読者の脳裏にそのテーマを自然と、まさに花火みたいにパッと打ち上げるのが名文学だと思う。俺はね。

だから同じテーマならたとえば、「バカなヤングはとってもアクティブ それを横目で舌ウチひとつ」っていう、電気グルーヴ「N.O.」のクソみたいな空気感のほうが俺にはグッとくるし、文学的だ。身銭切ってまで「共感の笑いはつまらない」なんて飲み屋の親父みたいな説教は読みたくない。

あと、風俗勤めで芸人を支える薄幸な女性ヒロインがいて、「彼女の人生を僕は全力で肯定する」的な感動の場面があるんだけど、これは『ノルウェイの森』のハツミさんのエピソードを彷彿とさせる（作者は春樹好きみたいだし）。ただ、ハツミさんに比べると、このヒロインは薄幸のバランスが悪い。

もし誰かを「全力で肯定」したいなら、その誰かはまず世間から「全力で否定」されていないと言葉が浮いてしまう。例えば長期間壮絶な苛めにあっていたとか、スカトロ系の地下クラブで奴隷やってますとか、原発作業員ですとか、そういう世間があえて見ないようにしている禁忌な存在に対して、「僕は全力で肯定する」って言葉がやっと成立する。むしろ二回言うけど、原発作業員とかね。もっと原発作業員（と南）のこと、ちゃんと見ててよ（タツちゃん）って俺（と南）は思うからさ。いや、南ちゃん、邪魔。

でもこの（南じゃない方の）ヒロインは、ただスカウトを断わり切れなかった優柔不断な風俗嬢で（これ実は嘘かもしれないけど嘘だとわかるほどの材料も読者にはなくて）、結局は客とできちゃって、その後子供も産んだ感じになってて、他人からは不幸っぽく見えるけど本人は割と幸福な人っぽい。少なくとも他人から「全力で肯定」されなきゃならないほど、誰からも否定されたり蔑まれてない。そして南ちゃんが本当に邪魔だ。南風に帰らせます。

ハツミさんの死に比べると、このヒロインの悲劇感はだいぶ薄いけど、これ書いてて思い出した。学生の頃、俺がハツミさんの魅力について語ったらUが「あんなの大した女じゃない」って侮蔑して、えらいケンカになったことあったね。懐かしい。青春だ、まさに。

というワケでいい小説だったよ、『ノルウェイの森』。いや、『火花』ね。前半はどうしようかと思ったけど、最後のほうがそれなりだった。少なくとも西加奈子よりは面白かった。「たぶん西加奈子よりは面白い」って帯に変えたほうがいいよ、たぶん。だって煽りすぎだもん。「この物語は、人の心の中心を貫き通す」って、流石に仰々しすぎる。しかも「人の心の中心を貫き通す」って言葉自体、人の心の中心を狙いすぎてる割に手垢にまみれてて、貫通するにはナマクラなコピーだよ。作者自身は「あほなりに真剣に人間を描きました」的なこと言ってるワケだから、むしろそっちでいい気がする。

というワケで次回のはみだしウマシカさんは「ヒバナの瞬き」じゃなくて、前回取り上げた自殺から逃げる話題を戯曲化する企画です。今回やろうと思ったんだけど、間に合わなかったので、あしからず。

今回はこんな感じ。ピケティ読んでくれて、本当にありがとう！  
どうかな？



考えるウマシカ～第二十二回 『21世紀の資本』と「ヒバナの瞬き」～

<http://p.booklog.jp/book/97246>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97246>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97246>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ